

ロマノフ王朝時代の研究をしている友人に勧められ、香水に無縁の私も、マリリン・モンローの名言で知られる、シャネル№5 についての本を読みました。著者は友人の友人である宇都宮大学講師の大野斉子氏です。この香水に関して、八重の薔薇の花びらを一枚一枚めくるように、化学的方法による製法から始まり、歴史的、文化的考察を重ねて、謎を明かしてくれました。



シャネル№5はフランスのデザイナー、ココ・シャネルがロシアから亡命した調香師エルネスト・ボー(1881-1961)に依頼し、作らせた香水で、1921年に販売され、今に至っています。百年近い間、名香として愛好されています。ボーはフランス人ですが、ロシアで調香師として働く父のもとに生まれ、石鹸工場を皮切りに、香料と関わる事業を成功させ、多くの香水を作りました。1917年のロシア革命で財産すべてを失いましたが、フランスで新生活を始め、シャネル№5で大成功を収めたのです。

ボーは「北極圏のヨーロッパ、白夜の頃に、湖や川が大変みずみずしい香りを放つ。この香調を記憶して作った」のがシャネル№5であると言っています。その場所とはロシアです。以前に作った香水「ブーケ・ド・カトリーヌ」を基礎にしたと推測されていますが、シャネル№5の組成はバラのエッセンシャルオイルにアルデヒドのある物質を用いたと分析されています。ボーは、香水とは「名香であるだけでなく、記憶、物語、歴史を表現する芸術である」と言っています。嗅覚によってしか感知できない存在ですが、体臭と混じり、シャネル№5もデリケートに変化し、独自の表現になり得ます。

香水と言えば、かつては王侯貴族の贅沢な嗜好品でしたが、ロシアで需要が高かった理由には、「悪臭はその人の隠された罪」という宗教上の罪と結びつけて考えられ、清潔を求める土壌があり、香りで病を追い払うという伝統があったということです。フランスでの不潔、悪臭隠しの用途とは別でした。香りは高貴、聖、美の表現として用いられました。また、媚薬としての効用も期待され、身体とイメージを重ねますので、非常に人間的な部分が生まれます。逆に、超人間的な想像も可能になります。香りは目に見えないだけに、イメージを膨らませる作用を持っています。文学の世界、音楽の世界に働きかけるパワーを持っているのです。美的、神秘的豊かさを増します。香りをテーマ、モチーフに展開させる、ロシアの作家や芸術作品を紹介しています。

さて、香料は元来オリエントに発祥していますが、聖書で香りに関する最古の記事は、ノアの燔祭です。主は宥めの香りをかいで、御心に言われた。「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。(創 8:21)ノアが洪水から救われ、清い家畜、清い鳥を焼き尽くす捧げ物として祭壇に捧げ、感謝した時、神がその香りを喜んだとあります。この動物性の香りを民は信仰の伝統にしてきました。

また、族長イサクは目が見えなくなり、長男エサウの上着を着た次男ヤコブに騙されて、祝福を与えました。その時にああ、私の子の香りは主が祝福された野の香りようだ(創27:27)とエサウの着物の匂いをかいで満足しています。動物性の、また、体臭と関係した香りが記されていますが、もちろん香木、香油、香草、樹脂や、いろいろな花から香料が抽出され、次第に、神殿での儀式や、日常生活、美容に用いられています。イエス様の御降誕の折には黄金、乳香、没薬が捧げられています。

使徒パウロはキリストを「香りのよい供え物」と言っています。キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。(エフェ5:2)後半で、「愛によって歩みなさい」と付け加えていますので、キリストに心を寄せるならば、私たちも「愛」を香り立たせなければならないのでしょう。

香水だけでなく、身の回りに豊かに与えられている香りを大切にしたいです。スパイス(香辛料)やフレーバー(香味)等は、食事に醍醐味を与えてくれます。自然は香りの宝庫です。